

— 動き出したダイバーシティの取組み —

「取材協力」エビナ電化工業株式会社(東京都大田区) 今や「リケジョ」が活躍する企業

終戦後間もない1946年に、焦土の中で創業されたエビナ電化工業は、各種素材の電気めっきや無電解めっき加工の分野で、先進的な独自技術により高い評価を受けてきている少数精鋭企業です。

1960年代から1970年代にかけての高度成長期には、国内大手メーカーにめっき加工した部品を納入する事業が中心となっていました。国内メーカーによる海外への生産拠点の移転が本格化し始めた1990年代からは、自社の生き残りをかけて技術志向を加速する展開となりました。

同社の海老名功祐取締役総務部長は、「『めっきは3Kの職場』というイ



女性比率が高い研究開発部門の現場

メージを払拭して、研究開発型企業への脱皮を図るため、2000年頃からCI(コーポレート・アイデンティティ)活動を本格的に開始する一方、伝統的な技術開発を可能にする優秀な研究人材を集めるため、工場やトイレなどの建屋も近代的な施設に大幅改装して働きやすい環境の整備に取り組みました」と振り返っています。

2009年には、先代の急逝により現社長が3代目として就任し、それまでのカリスマ的な統率力を発揮する経営スタイルから、社員一人ひとりが主体的、自律的に行動できる経営スタイルに転換。現社長は分権化を推進し、経営方針から業務の進め方、評価まで制度化して、透明性を担保する仕組みを導入しました。

多様な人材を活用し、付加価値の高い技術サービスを提供していくため、従来の働き方を刷新しようと働き方改



海老名功祐取締役総務部長

革も推進していますが、そのきっかけとなったのは、「2000年代に入ってから採用を進めてきた優秀な女性社員らが一斉に産休に入るというライフイベントに対応するための取り組みだった」(海老名部長)といえます。

技術者対象に在宅勤務も検討中

同社では、「開発部」で17人中10人が女性で占められるなど、特に、研究開発の分野で女性社員の比率が高く、経験を積んだ女性社員に育児期間を経て復帰してもらうために必要な制度の導入を、当事者にも聞き取りをしながら、働き方改革のための整備とともに進めてきました。その中で新たに採り入れられたのが、短時間正社員制度で、子どもが小学校に入学するまでの期間、週5日4時間勤務を行うことが可能となっています。さらに、2014年からは保育料補助や早期復帰時金制度、再雇用制度も新設し、職場復帰を果たしてもらったための支援策が講じられるようになりました。

海老名部長によると、現在、技術者を対象とした在宅勤務の可能性についても検討中で、「より創造的な仕事ができるように、限られた時間でメリハリのきいた働き方に改める」取り組みが進められています。

「時間を気にせずに受注した仕事をひたすらこなす昭和の時代の働き方では淘汰されてしまいます。頭を



「リケジョ」の活躍で企業ブランドも向上

使った付加価値の高いモノを作り、差別化できる製品やサービスを生み出し続けるためには、会社以外の生活を充実させ、インプットを増やす必要があると考えています」(海老名部長)

働き方改革や仕事と育児の両立支援策の拡充などを通じて、社員のモチベーションも向上してきており、現在では、就業時間中に業務を終わらせる段取りが浸透し、一部の部署を除いてほぼ定時で退社するという「ワーク・ライフ・バランス」も実現されるようになりました。

こうした成果によって、大学・大学院卒の優秀な人材が集まると同時に、「リケジョ(理系女子)」の活躍する企業としてメディアにも取り上げられるようになり、企業ブランドの向上にもつながっています。